

黒川温泉における賑わいの構造に関する研究

A study on the structure of “nigiwai” in Kurokawa onsen

熊本大学大学院自然科学研究科社会環境工学専攻 塩田 幸司

1. 序論

本研究の目的は、賑わいの構造を明らかにすることである。そこで、活動と環境との関係から賑わいを形成する要因を分析し、両者の特性と役割について考察する。なお本研究で述べる活動は、「生活や観光行動に伴う諸活動」を対象とする。一方の環境は、「主体を取り巻き、主体に直接的あるいは間接的に影響を及ぼす要素間の関係性によって構築された、場の状況」と定義し、屋外空間における自然的環境と人工的環境を扱う。また本研究の視点としては、賑わう空間内に存在する人々の意識までも含めて考察することから、研究対象地を一般的な賑わいがみられる都市部ではなく温泉地とする。

2. 賑わいの定義

本研究における賑わいの要件として、以下を示す。

- 1) ある程度の人の数の存在
- 2) 多様な活動の存在
- 3) 活動を規定する共通意識の存在

この要件を踏まえて、ある特定の場所を楽しもうとする共通意識をもった人々が、その目的達成のために多様な活動を行なっている「活気ある様」を本研究における賑わいの定義とする。

3. 研究対象地の位置づけ

「ある特定の場所を楽しむ」という共通意識を持つ人々が多く集まる場所においての、活動と環境の関係性を読み解く観点から、研究対象を温泉地とする。その中で、都市部と異なる環境にあり、近年多くの人が訪れ賑わいがあるとされる、熊本県の黒川温泉を本研究の研究対象地とする。

4. 活動に関する分析

賑わいの構造を把握する手順として、まず活動に着目した分析を行なう。そこで、短時間で効率的に活動の状況を調査するため、ビデオ撮影による歩行者活動調査を行なった。調査地点は以下の3地点である。

- ①丸鈴橋と周辺街路(調査時間 13:30~14:00)
- ②地藏湯前の交差点(調査時間 14:30~15:00)
- ③いご坂(調査時間 15:10~15:40)

(1) 歩行者数に着目した分析

屋外空間での活気の評価指標である歩行者空間モジュール (m^2 /人) を求めた結果、最も活気があると判断されたのは調査地点②であったが、活気があるという評価は示されなかった。この理由としては、この歩行者空間モジュールが単なる人出の多さのみによって活気を判断する「都市の賑わい」をはかる指標であり、温泉地のよう

な、純粋にその場所を楽しむことを目的とした人の数の多さによって形成される活気とは、歩行者の絶対数に開きがあるためであると考えられる。

(2) 活動の多様性に着目した分析

現場で観察された行動内容に基づき、調査地点①、②、③における屋外空間の質や活動水準の値を求めた。その結果、最も高い値を示したのは、3つの調査地点の中で最も多くの行動内容が観察され、滞留時間も長かった調査地点②であった。これより、屋外空間の質が高ければ多様な活動が誘発され、滞留時間を助長するはたつきがあると考えられる。

5. 賑わいの構造に関する考察

活動と環境の関係性に着目した分析を踏まえて、各調査地点における賑わいの構造について考察した。

(1)調査地点①:この地点は「出会い」という共通意識に加えて、沿道の店舗群や川などの環境要素の機能連関によって賑わいが形成されている。

(2)調査地点②:この地点は集客の核となる店舗の存在と、環境要素の緊密な機能連関によって「たまり」という賑わいが形成されている。(図1)

(3)調査地点③:坂道というこの地点での環境の変化が来訪者の意識を高揚させ、目的地での活動を活発にする。つまり、ここでの環境の変化が、来訪者個人他の場所での活動の多様性を広めるという意味で、機能連関が行われていると考えられる。

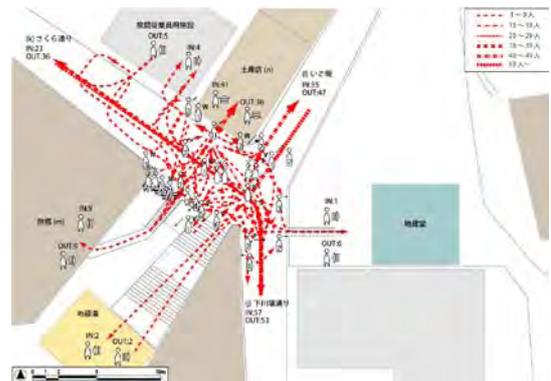


図1 調査地点②における歩行者の活動内容

6. 結論

本研究では、活動を規定する共通意識と環境の機能連関が、賑わいの形成において重要であることを示した。屋外空間での機能連関を高めるには、活動の焦点へと至る過程までも含めた一体的な環境整備が重要であると考えられる。